

# 地域防災劇団の演劇公演を通じた社会的レジリエンスの創発 による防災・減災のこころみ

福島 祥行<sup>1)</sup>

1) 大阪市立大学 大学院文学研究科 e-mail: fukushim@lit.osaka-cu.ac.jp

本論文は、CERD 事業の一環である地域防災劇団のプロジェクトについて、現時点での総括をおこない、その目的、達成度などを確認したうえで、以下の点を主張する。すなわち、(a) 災害時に臨機応変な対処が可能な能力を陶冶する。(b) たがいに助けあう社会的レジリエンスを創発する。(c) 社会的レジリエンスは、他者をふくむ外界（環境）との相互行為のなかではじめて発揮される能力をもたらす、災害時に、他者と「頼り／頼られる関係」をむすべるようにする。

Key words : 社会的レジリエンス，地域防災劇団，相互行為，弱いロボット

## 1. はじめに

市民にたいする「防災・減災教育」を考えると、もっともダイレクトかつシンプルなものは、「授業」形式により、「知識」と「経験」をあたえ、「想像力」をつけることで、きたるべき災害に対処する力を涵養することであろう。しかしながら、「既存の知識」は古びることもあるため、第一に重要なのは、災害時に、自身をとりまく状況、すなわち刻一刻と変化する外部環境に応じて、臨機応変に「自ら考え、自ら行動できる」市民、すなわち「自律的防災市民」を育てることである。いうまでもなく、教育期間がおわってもなお学びつづけることのできる「自律的学習者」に育てることは、「教育」一般に通ずるものであり、したがって、「防災教育」においても、つとにジョン・デューイの思想に淵源をもつとされる PBL (Project-Based Learning プロジェクト型学習)<sup>1)</sup> や、文科省のお墨付きをえた Active Learning (能動的学習) など、いわゆる「座学」にとどまらない教育／学習方法がこころみられるのは、当然の趨勢といえよう。

しかしながら、災害時に対処をもとめられる事態はきわめて多様であり、いくつかのケースやシチュエーションに分類しておわりというものではない。また、「市民」という集団も、一般的な学校におけるクラスのメンバーのような均質性の高い集団と異なり、きわめて多様性に富む不均質な集団である。クラスルーム内での教育／学習方略とは異なる方略がもとめられるゆえである。

そこで、本稿では、大阪市立大学が 2012 年の年末に開始し、現在にいたるまで継続している「地域防災劇団プロジェクト」を、防災・減災のための教育／学習のプロジェクトと位置づけるなかで、その特徴と有効性を論ずることにより、以下の(1a)～(1c)を主張する。すなわち、

- (1) a. 地域防災劇団の活動は、災害時に、臨機応変な対処が可能な能力を陶冶する。
- b. 地域防災劇団の活動は、演劇公演を準備し、上演するプロセスにおいて、たがいに助けあう社会的レジリエンスを創発する。
- c. 社会的レジリエンスは、他者をふくむ外界（環境）との相互行為 interaction のなかではじめて発揮される能力をもたらす、災害時に、他者と「頼り／頼られる関係」をむすべるようにする。

これを論ずるため、以下では、まず、演劇と教育／学習の関係についてのべ、ついで、演劇のようなアート活動

<sup>1)</sup> おなじように、学習者主体かつ協働的に、ひとつのテーマにそって学習をすすめていく学習方法に、1960 年代カナダの医療学習からはじまったとされる Problem-Based Learning (問題解決型学習) があり、プロジェクト型学習とおなじく PBL と略される。両者の相違点については、学生主体問題設定 (プ) か教師主体問題設定 (問) か、プロダクト重視 (プ) かプロセス重視 (問) か、時空間制約がゆるい (プ) か時空間制約がきつい (問) か、などの点があげられる<sup>1)</sup>。

がいかにして社会的レジリエンスにむすびつくかを理論的に考察したのち, 地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニー (以下 SAC) の設立経緯とこれまでの経過を概観し, 地域防災劇団としての SAC における活動の具体的分析をとおして, 上にのべた(1)を論証する。

## 2. 演劇と教育/学習

演劇研究には「演劇教育」というジャンルがあるが, 演劇 *theatre* を教育にもちいることは, 洋の東西を問わず実践されてきており, とりわけイギリスで 1960 年代後半に形づくられた実践は *Theatre in Education (TIE)* というタームによって知られる<sup>2)</sup>。これは, 一般的に, 演劇を実践することにはつぎの要素がみとめられることによる<sup>3)</sup>。

- (2) a. 台本というテキストの読解力や, 物語の理解力を涵養する。
- b. 演技をつうじて, 表現力を涵養する。
- c. 他者に成ることをつうじて, 想像性や共感性をゆたかにする。
- d. 役者同士やスタッフとの集団作業をつうじて, 協働・協調性を身につける。

(2a)~(2d)は学校教育において求められる代表的な目標のうちのいくつかであり, とりわけ(2c)(2d)は「市民教育」としても求められる要素である。このことから, 演劇は, 学校における教育/学習において有効とされているが, 「防災・減災」という, 市民社会一般にかかわるテーマを視野にいれるとき, 本番中に生じるさまざまな事態にその場で即興的に対処するといった演劇ならではの事態を経験することは, きわめて「教育的」と考えられる。このことから, 「防災・減災教育」に演劇を導入することは, (2)にくわえ, (3)の効果もえられる点において, 学校教育におけるよりも, より効果的であるといえよう<sup>2)</sup>。

- (3) 上演中のさまざまなトラブルに対処し, また仲間をフォローする即興的支持ができるようになる。

そもそも, 教育/学習とは社会的相互行為 *social interaction / interaction sociale* のひとつであり, そこにおいて得られる《知識》は, 教育/学習前から存在するア・プリオリなものではなく, 教育/学習によって生じるア・ポステリオリな社会的構築物 *social construct / construit social* である<sup>6)</sup>。したがって, 防災・減災にかんする「既存の知識」もまた, 教育/学習に際し, あたかもベルトコンベアにのせられた荷物が移動するかのようになり, 教え手から学び手に手渡されるようなものではなく<sup>3)</sup>, 教え手と学び手が協働して, 学び手の「既存の知識ネットワーク」のなかに組みこむことで, 学び手の「血肉」とする必要がある。たとえば「フランス語のつづりの読み方の知識」のような「既存の知識」であっても, たんに学び手に提示すればよいわけではなく, それを「使える」, すなわち「じっさいのコミュニケーションにおいて活用できる」ようになってはじめて「知っている」といえる<sup>4)</sup>。同様に, 「〇〇のときには××」のような防災・減災にかんする《知識》もまた, 「〇〇のときには, なんらかの形でそれに対処できる」ようになることをめざさなければならない。この点からも, いわば「実技型」である演劇は, 防災・減災教育/学習にとって有効であるといえよう。

## 3. アートと社会的レジリエンス

上にのべたように, 演劇は「防災・減災教育」において有効であると想定されるとはいえ, それが, どのように, 具体的な防災・減災にむすびつくのであろうか。まず, SAC 創設時には, 「文化による防災」がめざされていた<sup>7)</sup>。それは, 具体的には「震災によって破壊されたコミュニティの復興」であり, 地域防災劇団創設発起人のひとりである中川眞がすでに実践していたテーマである。中川は, 2006 年のジャワ島中部震災においてはガムラン音楽,

<sup>2)</sup> 演劇を防災教育に適用した例としては, 2006 年に国の主導する「防災教育チャレンジプラン」に採択され, その後, 大阪府内で実施された防災演劇ワークショップが存在する。ただし, 台本によれば, 「直接的防災劇」であり, SAC とは取り組む理念が異なっている<sup>4)5)</sup>。

<sup>3)</sup> このような譬喩は「導管メタファー」と呼ばれ, コミュニケーション論的にも批判されている。

<sup>4)</sup> このような視点を「行動中心主義」*action-oriented / actionnel* とよび, 学習指導要領改訂の過程や, 大学入試の外国語問題にかかわって一般にも知られるようになった CEFR (Common European Framework of Reference for Languages ヨーロッパ言語共通参照枠) の採る方針でもある。

2011年の東日本大震災においては東北の山伏神楽をもちいて、震災後の分断された地域コミュニティの復興をこころみていた。じっさい、「文化」、とりわけ舞台藝術をふくむ「アート」——たとえばダンスや歌——は、その起源を「祭祀」にもつが<sup>8)</sup>、その祭祀をつうじて、精神的・物理的にバラバラな状態にある人びとを「よびあつめ」「つなぎあわせる」機能をになってきた<sup>9)</sup>。中川の取り組みは、その機能を利用し、地域行事であった祭祀の復元により、その地のコミュニティ復興をめざしたものにほかならない。

一方、災害後の復興過程において、コミュニティのメンバーの、ふだんの地域活動への参加の程度が高い人ほど支援を受けられやすいこと、およびボランティア活動に積極的な人ほど支援する意識がつよいことが示唆されていることから<sup>10)</sup>、コミュニティのメンバー間にあらわれる「社会的紐帯」social relationship / lien social が強くなるような仕掛け、すなわち、ひとつの企画（たとえば演劇）を能動的・主体的に運営するという協働 collaboration ・協調 cooperation 活動があれば、その活動の参加者間では、災害時や災害後の助けあいの意識がつよまることが予想される。じっさい、岸和田のだんじり祭が地域住民間の信頼に貢献し、結果的に防災意識や自助・共助意識をたかめることをしめす研究も存在する<sup>11)</sup>。したがって、中川の実践結果をふまえ、現代の地域社会に、いっしゅの祭祀としてのアート、すなわち「人びとをむすびつける装置」を導入することにより<sup>5)</sup>、地域社会に、既存の地縁、血縁とは異なるあらたな人びとのつながり、すなわちコミュニティを創発させるとき、そのコミュニティは、高い防災力（おそらく減災力）を持つことになるとおもわれる。そして、その仕掛けが「演劇」であるとき、(2)(3)にあげた利点から、そのコミュニティのメンバーは、災害後に指示どおりの支援をこなすだけでなく、状況に応じて「補いあい、助けあう」ことが可能で、災害等により打撃をこうむっても、しぶとく立ちなおることが可能な能力、すなわち「社会的レジリエンス」(resilience / résilience =問題に直面したときのつよさ、修復力、耐久力)をそなえているといえよう。演劇によって生じた人間関係が、防災・減災に役立つゆえんである。

#### 4. 地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニー (SAC) という実践

##### (1) SAC の概要

筆者が旗揚げ時からかわり、現在も代表をつとめる「地域防災劇団スミヨシ・アクト・カンパニー」(SAC)のプロジェクトは、上にのべたような「社会的レジリエンスをそなえたコミュニティの創発」をめざしている。SACは、2013年3月16日、大阪市立大学で開催された「地域防災フォーラム——いのちを守る都市づくり」の第1部において、「地域防災劇」を上演すべく結成された。発案者は、のちに大阪市立大学都市防災教育研究センター(CERD)の初代所長をつとめることになる生活科学研究科の森一彦教授である。以後、年に一回のペースで公演をおこない、現時点では、2019年3月3日に第7回公演をおこなうところまで決まっている。

表1 SAC 公演リスト

回	タイトル	作	演出	公演日	場所	役者人数
1	時のしずく——いのちを守るまち1	スミヨシ・アクト・カンパニー	福島よしゆき	2013年3月16日	大阪市立大学学術情報総合センター10F大会議室	20名(うちこども5名)
2	ひかりはそこに——いのちを守るまち2	スミヨシ・アクト・カンパニー	福島祥行	2014年4月5日	住吉区民センター小ホール	21名(うちこども9名)
3	星のつぶやき——いのちを守るまち3	スミヨシ・アクト・カンパニー	ふくしまよしゆき	2015年3月21日	大阪市立大学学術情報総合センター10F大会議室	21名(うちこども10名)
4	時のしずく II——いのちを守るまち4	スミヨシ・アクト・カンパニー	スミヨシ・アクト・カンパニー	2016年2月21日	田中記念館ホール	21名(うちこども10名)
5	七夕のねがい——いのちを守るまち5	佐伯嘉弘+スミヨシ・アクト・カンパニー	福島祥行+スミヨシ・アクト・カンパニー	2017年3月4日	田中記念館ホール	32名(うちこども20名)
6	セカイノヒミツ——いのちを守るまち6	佐伯嘉弘+スミヨシ・アクト・カンパニー	福島祥行+スミヨシ・アクト・カンパニー	2018年3月4日	田中記念館ホール	27名(うちこども14名)
7	いのちを守るまち7(仮)	スミヨシ・アクト・カンパニー	スミヨシ・アクト・カンパニー	2019年3月3日	田中記念館ホール	未定

<sup>5)</sup> 英語 art は仏語 art 由来であるが、仏語 art はラテン語 ars (属格 artis, 対格 artem) 技・学問・知識・藝術 =ギリシャ語 τέχνη 手わざ)を語源とする。さらにこの語は ar- (つなぎあわせる)を構成要素としてもつことから<sup>12)</sup>、つないだり組みあわせたりするコト、および、そのコトにより生じたモノのことである。ようするに、「藝術」とは、モノとモノ、モノとヒト、ヒトとヒトをむすびつけるコト/モノであるといえよう。

設立時から第2回公演までの経緯と、そこに見いだされる課題については中川・福島 (2014) 7)において、その後のメンバーの防災意識についての量的統計分析は佐伯・福島・中川 (2016) 13) にて報告済みであるため、ここではその後の経緯の報告と、分析、考察をおこなう。

## (2) SACの目標

SACは「地域防災劇団」であり、その上演するところの芝居は「防災劇」である。一般的に、「防災劇」といえば、観客にたいして「災害にあったときの避難や対処法をしめす劇」といった、いわゆる「防犯劇」のような啓蒙的、ハウツー的なものを想像されることがおおい。しかしながら、SACのとりくむ「防災劇」は、当初から、そのような「明示的防災・減災意識」を前面におしだしたものとはなっていない。その理由は、2でも見たように、そもそも教育/学習における《知識》の獲得というものが、「明示的に提示された文言を記憶する」ことではなく、「現実の社会的環境において、じっさいに行動できる」ことという点にある。つまり、SACにおける上演とは、観客に「明示的防災・減災状況」の、いわば「ハウツー」を提示するのではなく、より演劇の特性を活かし、他者と協働しつつ直面した事態に対処するストーリーを追体験してもらうことで、より普遍的《知識》を獲得してもらうことをめざしているのである。

ようするに、SACという地域防災劇団のプロジェクトの目標は、演劇による教育/学習の特性である(2)(3)をふまえ、(4)のようにまとめられよう。

- (4) a. 演劇集団をつうじてあたらしいコミュニティを生じさせ、人と人とのつながりを創発させる。
- b. 他者との協働的 collaborative / collaboratif・協調的 cooperative / coopératif な活動の訓練となる。
- c. 予測の内外の事態に臨機応変に対処する訓練となる。

以下では、この目標がどの程度達成されているかについて検討する。

## (3) SACの現状

SAC旗揚げから第2回公演までの経緯と、その時点での問題点を指摘した中川・福島 (2014) 7) では、第2回公演において、当時10歳の役者がセリフを失念し、にもかかわらず、舞台上にいた他の役者たちは、なんとかフォローをしようとするも、結果的になにもできず、約2分間にもわたる「間」があいてしまったことが、いっしょの「災害」として報告されている。この種の「セリフ忘れ」は、事態を想定した役者たちによってフォローされることが常態となっている。本番におけるセリフ忘れは、こどもの役者におおいのだが、そのような事態が生じたとき、同時に舞台にでているおとなの役者たちは、ヒントになるセリフを口にしたり、その忘れられたセリフ部分を説明するセリフをいいながら、つぎの展開へとつなげたりなどの工夫をするようになった。第5回公演では、初舞台のこどもの役者がふえたこともあり、本番中のセリフ忘れが頻発したが、いずれのケースも、おとなの役者たちによってカバーされるさまが観察された。ぎゃくに、稽古中、おとなたちのセリフ忘れをこどもたちが指摘し、セリフを教えるという行動も見られる。これらの点において、(4b)(4c)の訓練は達成されているといえよう。

また、第4回公演の後におこなわれた質問紙調査の結果を分析した佐伯・福島・中川 (2016) 13) では、「近所の人びととの関わり」の度合いが高まったことが報告されており、SACの活動が、劇団というコミュニティ内のみならず、もともとの地域コミュニティにも望ましい影響をあたえることがしめされていたが、他方、劇団活動により「忙しくなった」と意識されていることから、活動の継続性、劇団の持続性が今後の課題となりうると指摘されていた。しかしながら、表2に見られるように、今回が初のメンバーを除く全50名の参加者中、複数回参加したことのあるメンバーは39名であり、単純計算でのリピーター率は78%となることから、継続性、持続性の課題についてもクリアされていると判断できよう。

さらに、SACは、2016年12月の稽古時と2017年3月の本番時に、ケーブルテレビのベイコムから取材を受けているが、その際、旗揚げからのメンバーは「それまでぜんぜん知らなかった人たちとの関係ができた。こないだの豪雨のときも、開設した避難所の手つだいにきてもらった」と答えており、新規参加メンバーは「地域の方たちと仲良くなれたらということではいりました」と話している。これらの発話からも、(4a)にあげた「あらたなコミュニティ」「人と人とのつながりの創発」は達成されていると評価できよう。

表2 SAC参加リスト（横軸はメンバー，縦軸は公演回数）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52						
1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				
2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
計	7	7	1	6	6	5	2	3	2	7	7	4	7	7	1	2	7	1	5	1	3	1	6	5	1	3	3	4	3	5	2	2	1	2	3	2	2	2	1	2	3	3	3	2	3	1	1	1	1	2	2	1	1	1				

(4) SACにおける気づきと工夫

表2に見られるように、旗揚げメンバーの半数以上が継続的に参加している SAC であるが、防災・減災のためのコミュニティづくりが目的でもあるため、つねにメンバーを募集している。今回の公演においても、すでに2名の新規参加メンバーが存在するが、このようなコミュニティの拡張のための「参入しやすさ」をめざして、劇団運営にはさまざまな工夫がなされてきた。それは、たとえば、以下(5)のようなものである。

- (5) a. 演劇的完成度を担保しつつも、「あの舞台なら参加できそう」という敷居の低さをめざす。
- b. 「おとなー子ども」「演出家ー役者」「経験者ー未経験者」のような権力階層構造（つねに前者が後者をしのぐパワーをもつ）をあえて崩し、メンバー間の関係性がフラットになることをめざす。
- c. ストーリーは、全員でつくる。
- d. 「付き添い」といった関係性ではなく、「一個人」として主体的に参加しているという意識をもってもらうため、「○○ちゃんのお母さん」のような呼び方ではなく、個人の名前（とりわけ「下の名前」）や愛称で呼ぶ。

(5a)は、直接的に、SAC への参加をうながすものである。新規参入メンバーは、すでに参加しているメンバーの知りあいであることがおおいが、なかでも、メンバーの宣伝をうけて SAC を観劇し、その後に参加するというパターンがおおい。じぶんの観た芝居のような舞台に参加してみたいと思ったとしても、「プロ志向」の舞台では敬遠されるおそれがある。その点、稽古場の雰囲気もふくめ、ある種の「ゆるさ」は必要である。また、災害時に「助け／助けられる」という関係が固定されず、反転して「助けあい」となるためには、対等な関係性が必要となる。くわえて、みずから主体的

図1 SAC本番風景（第6回公演）



に行動するためには、自律性が不可欠である。その点にかんがみて、(5b)(5c)(5d)は、災害時に自主的に判断して行動するという自律性をつちかうことにつながっている。じじつ、稽古場において、子どもがおとなの発話や行動を訂正し、おとなが素直にしたがうさまが観察されている。(5b)～(5c)の工夫が実ったケースといえよう。

5. 防災・減災と相互行為

防災・減災で、なによりたいせつなことは「共助」である。それをふまえ、SAC というプロジェクトは、地域にはられた人的ネットワークや、臨機応変に協働・協調する力、問題が発生したときに思考停止せず他人と協力しながら乗り越えようとする積極性をつちかうことを目的としている。なぜなら、都市における災害においては、どれほど「完全な防災知識」があっても、ひとりだけではサバイバルできない。ぎゃくに、「不完全な防災・減災知識」しかもっていない人びとであっても、他者と補いあい、知恵を出しあうことで、サバイバルが可能となる。したがって、なににもまして重要なのは、

- (6) a. コミュニティをつくること、すなわち、人と人がつながる。

b. ひとりでやろうとせず, 他者を頼り, また頼られる関係を志向する.

ということになろう。(6a)は, これまでも確認してきたことであるが, (6b)は, このところ, 言語教育/学習のフィールドにおいて筆者の研究している「弱いロボット」の思想<sup>14) 15)</sup>につながるものである. この思想とは, かんたんにいってしまえば, (7)のようにまとめられる<sup>16) 17)</sup>.

(7) 人間の「能力」は, 個人のうちに閉ざされたものではなく, 他者をふくむ外界の環境との相互行為 interaction によって, 個人と外界の間に立ちあらわれる<sup>6</sup>.

いうまでもなく, われわれは社会的存在であり, ひとりきりでは存在しえないのであるが, くわえて, 他者(外界)の支えと援けがなければ, 足をふみだすことすらできない. この観点からすると, レジリエンスとは, じぶんの外部に, おおくの足場や支援者をもつということであり, 防災・減災において, 人間関係がその重要なひとつとなることは疑いをいれない. かくして, SAC がめざす社会的レジリエンスの創発とは, そのような足場や支援者をふやし, 相互行為の機会をふやすことで, 「能力」が発現する場を設けることといえる. SAC というプロジェクトは, その目標にむけて着実にすすんでいるといえよう.

## 6. 参考文献

- 1) 溝上慎一 (2016): アクティブラーニングとしての PBL・探究的な学習の理論, アクティブラーニングとしての PBL と探究的な学習 (アクティブラーニング・シリーズ 2), 東信堂, 5-23.
- 2) Turner, Oliver (2010) : A history of theatre in education at the belgrade theatre, coventry, <http://www.belgrade.co.uk/files/downloads/192/TIE%2Beducation%2Bpack.pdf> (最終閲覧 2018年9月23日).
- 3) 平田オリザ・蓮行 (2009): コミュニケーション力を引き出す, PHP 新書, PHP 研究所.
- 4) 蓮行・鈴木星良・末長英里子 (2016): 演劇ワークショップの政策実装に関する考察, 実践政策学, 第2巻第2号, 実践政策学エディトリアルボード, 203-209.
- 5) 宇治市立平盛小学校 (2006): 平和を守れ! 平盛小防災レンジャー, 防災教育チャレンジプラン, [www.bosai-study.net/2006houkoku/plan07/seika2.pdf](http://www.bosai-study.net/2006houkoku/plan07/seika2.pdf) (最終閲覧 2018年9月23日).
- 6) 福島祥行 (2015): 協働学習における「学習者」の構築——フランス語初修者の相互行為分析から——, 人文研究, 第66巻, 大阪市立大学大学院文学研究科, 153-171.
- 7) 中川眞・福島祥行 (2014): 都市防災のための地域劇団創成プロセス, 都市防災研究論文集, 第1巻, 大阪市立大学都市防災研究プロジェクト, 43-49.
- 8) 折口信夫 (1928): 鸞替へ神事と山姥, 折口信夫全集, 第16巻, 中央公論社, 417-429.
- 9) 福島祥行 (2012): 都市・境界・アート——コミュニケーション空間の相互行為的生成について——, URP GCOE DOCUMENT, 13, 水曜社, 72-81.
- 10) 川脇康生 (2014): 地域のソーシャル・キャピタルは災害時の共助を促進するか——東日本大震災被災地調査に基づく実証分析——, The Nonprofit Review, Vol.14, Nos.1&2, 日本 NPO 学会, 1-13.
- 11) Bhandari, Roshan Bhakta, Okada, Norio, Yokomatsu, Muneta & Ikeo, Hitoshi (2010): Building a Disaster Resilient Community through Ritual Based Social Capital: A Brief Analysis of Findings from the Case Study of Kishiwada, 京都大学防災研究所年報, 53B, 137-148.
- 12) Bréal, Michel & Bailly, Anatole (1885): *Dictionnaire étymologique Latin*, Hachette.
- 13) 佐伯大輔・福島祥行・中川眞 (2016): コミュニティ劇団メンバーを対象とした防災力測定, 都市防災研究論文集, 第3巻, 大阪市立大学都市防災教育研究センター, 13-18.
- 14) 岡田美智男 (2012): 弱いロボット, 医学書院.
- 15) 岡田美智男 (2017): 〈弱いロボット〉の思考 わたし・身体・コミュニケーション, 講談社.

<sup>6</sup> これはつまり「個体能力主義」の批判であるが, 詳細は石黒 (1998=2013)<sup>18)</sup>, 岡田 (2012; 2017)<sup>14) 15)</sup>を参照.

- 16) 福島祥行（2017）：相互行為分析からみたグループワークにおける「アクティブ」の発露について，外国語教育メディア学会（LET）第57回全国研究大会発表予稿集，外国語教育メディア学会，154-155.
- 17) 福島祥行・中條健志・有田豊・大山大樹（2017）：「アクティブ」とはなにか？——理論と実践——，RENCONTRES, 第31号，関西フランス語教育研究会，21-25.
- 18) 石黒広昭（1998=2013）：心理学を实践から遠ざけるもの，新装版 心理学と教育実践の間で，東京大学出版会，103-156.